

# 共同体の風景と向きあう

高尾 忠志

正会員 博士(工学) 九州大学大学院工学研究院建設デザイン部門  
(〒819-0395 福岡市西区元岡744番地, E-mail:takao@doc.kyushu-u.ac.jp)

自治体行政のなかで画一化された「景観」を市民にひらき、社会的な合意を形成していくためには、景観を地域それぞれの目線でとらえ直すことが必要である。本稿では、内山節の共同体理論を参考に、共同体における風景の構造について考察し、さらに、我々(景観に関わる技術者)が共同体の風景にアプローチする際に持つべき姿勢や方法を整理した。そして、地域の人々が風景を「繕い続ける」ことが、そこに「ともに生きる世界」を生み出すことにつながるようにしていくことの重要性を指摘した。

**キーワード:** 共同体, 風景, 作法, 多層性, スケール, 入り口, 時間の流れ, 風景を繕う

## 1. 「景観」を市民にひらく

景観計画策定や公共施設の景観設計等、地方自治体の景観行政に関わっていると、「景観」に対する画一化および固定化した理解に直面することが少なくない。「景観は個人の土地に規制をかけるもの」「景観の事業はお金のかかるもの」という自治体職員や市民の言葉に、これを読んでいる皆さんも出会ったことがあるかと思う。そうした「景観」に対する一面的な理解は、住民や議会での景観施策に関する合意形成を困難にさせ、「景観」が行政からも市民からも敬遠される状況をうみだす一因となっている。

「景観」の画一化は、市民参加の場面にも見られる。ポストイットで町の良い点や悪い点、景観資源に対する意見を収集するワークショップが多く行なわれているが、こうした場面での議論もマニュアル化された「景観」に地域をあてはめるような議論が少なくない。これでは、見えないものまで含めた景観の意味や価値は景観行政の対象からもれていく。この型通りの意志決定プロセスが市民の「景観」離れに拍車をかけている。

その一方で、こうした現状を打破するために、時代の要請にあわせた景観の意味の再解釈も行なわれてきている。例えば、篠原は文化的景観制度の意義について「我國の国民と、その生業、生活の場である、まち、農山村、漁村が生命体として健全に持続し得るのか、という問いかけなのだ」と問題提起している<sup>1)</sup>。また、内藤は「美しさは生存のための最適な様態」として「施策としての『美しさ』は実利的なデザイン戦略であるべきだ」と「景観の戦略性」を強調している<sup>2)</sup>。さらに、佐々木は現代における景観の目的について、「文明、コミュニテ

ィ、環境、経済という地域の基本的なあり方と不可分な事象」であることを指摘している<sup>3)</sup>。こうした一連の問題提起から、景観がよいよ地域ごとに議論される段階に入ってきたことが伺え、このことと先に述べた地方自治体における「景観」の画一化とのギャップは大きな問題と言えよう。

こうした問題意識から筆者は、それぞれの地域にとって景観とは何か、そして、それをその地域の住民とどのように共有していくのかを考えることが、現在の「景観」の抱える課題としてきわめて重要だと考える。それはつまり、景観に関わる社会的な合意形成をどう形成するのかという課題である。

日本で最初に景観計画が策定された近江八幡市の景観担当であった深尾氏は、当時をふりかえって「景観は行政がお金をくれるから守るというものではない。行政担当者は地区住民に対して景観を守るための『本当の理由』を説明できないといけない」と語っていた<sup>4)</sup>。景観を守るための「本当の理由」は、地域によって様々であり、住民と行政が真剣な議論を重ね、景観の価値を共有することによってはじめて見えてくるものである。

我々景観に関わる技術者は、こうした「景観を市民にひらく」ための努力に参加していかななくてはならない。そのためには篠原や内藤らが指摘しているように、「景観」を地域の目線でとらえ直すことが必要ではないか。だとすれば、我々は地域をどのように理解し、住民とどのように向き合えばよいのだろうか。

このことを考えるための糸口として本稿では「共同体」に着目し、哲学者である内山節氏の共同体理論の力を借りて、共同体の風景にどのように向き合っていけばよいのかについて考察を深めたい。

内山は「ローカルな共同体がとらえられないかぎり、共同体という民衆の世界は本当にはみえてこない」(p167)<sup>5)</sup>と述べて、共同体研究における地域性の重要性を指摘しているのだが、それはそのまま「ローカルな景観がとらえられないかぎり、景観という民衆の世界は本当にはみえてこない」と読み替えることができるように思う。我々がローカルな共同体を通して風景をとらえることによって、風景はローカリティを獲得することができ、ひいては「景観」を市民にひらいていくことができるのではないだろうか。

そして、さらに内山は対談の中で「僕なんか上野村にいて、上野村さえよければそれでいいんだといつも思っています。そして上野村さえよければいいといえるやり方があれば、それは、よそにとってもきっと参考になることなのですね」と語っている(p215)<sup>5)</sup>。私たちは、それぞれの地域が、それぞれの地域にとってよいことに取り組める環境をつくるために、景観に関わる計画や設計における概念や思想、実践哲学、手法、実現化プロセスを見直して、時代に合わせて再構築していく必要がある。それぞれの地域にとってよいことをそれぞれの地域で考える契機となること。ここにこそ共同体に着目する最大の意義があると考えている。

## 2. 内山共同体理論の概要

ここでは、内山の『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』（農文協）に基づいて、共同体理論の概要を整理する。なお、豊かな経験と深い考察に基づく内山の理論を浅学な私が要約することは不可能であるので、ここでは後の考察に必要なポイントのみをつまみ食的に整理していることをご理解いただきたい。

### (1) 自然と人間の共同体

内山共同体理論によれば、欧米の「共同体」が人間の共同体を指すのに対して、日本の「共同体」は人間と自然の共同体を意味する。日本の共同体では自然もまた社会の構成者なのである。

したがって、日本の共同体を理解するためには、日本の伝統的自然観が重要な鍵となる。内山は、彼が居住している群馬県上野村がイノシシの被害にあった際の住民の反応を例にして、「村人にとって動物は仲間でもあり、害獣でもあり、猟の対象でも、尊敬の対象でも、神の使いでもあった」(p.44)<sup>5)</sup>と述べ、自然と人間との対等で一体的な関係を指摘している。さらに内山は、この住民の姿勢について「これでは全く矛盾している。(中略)だがこの矛盾を当然のこととして受け入れてきたの

が、村人の精神だったのである」(p.44)<sup>5)</sup>と述べ、「こういう風土に生きた人々は、合理的な精神をもつことより、矛盾とつき合い、矛盾と折り合いをつける能力を高めた」(p.46)<sup>5)</sup>ことを指摘している。つまり、日本の共同体を考える上では、自然とともに構成されている点と、そのことによって矛盾を受け入れる精神を持っている点が重要である。なお、この矛盾を受け入れる精神のあり方は、個人および社会における精神の多様性へと結びついていくのであるが、本稿の論旨とは離れるためここではこれ以上述べない。

さらに内山は、日本の共同体が「生きている世界だけでなく、死後の世界ももっている」(p.93)<sup>5)</sup>「生と死を包んだ共同体」(p.93)<sup>5)</sup>である点を特質として指摘している。例えば、これは死んだ人は山へ行き成仏するという考え方にあらわれている。日本の共同体は「自然を取り込み、自然への思いをたえず再生産することによって、自然と人間の自治をおこなってきた」(p.48)<sup>5)</sup>のである。

なお、こうした自然との関係については、都市における共同体においても「講」を通して形成されていた。例えば「富士講」では、毎年代表者が富士山にお参りすることで、遠くの自然と人間との関係を保持し続けていた。人間と自然との関係は、その「かたち」こそ違っても、「精神」においては都市の共同体においても共通のものを持っていたと言える。

### (2) 共同体の作法

内山は、上野村の祭や山上がり、山菜や茸狩り、作物の交換等を例にして、共同体の人々が自然とともに生きるなかで持っている「精神」は、人間と人間もしくは人間と自然のつきあいにおける「作法」(p.36)<sup>5)</sup>にあらわれていることを指摘している。例えば、生育に時間がかかり貴重な茸であるシノブとイワタケについては以下のように述べている(p.37)<sup>5)</sup>。

つまり、シノブとイワタケは集落の共有財産なのである。誰の山のものでもそれは変わらない。普段は手の届く範囲のものだけを採って「資源の保全」をはかり、誰もが納得するような理由でお金が必要になった人だけが「保全された資源」を採取する。私はこのルールを知ったときにも共同体の精神を感じた。

内山が「作法」や「ルール」と呼んでいるものは、「成文化されたルールなどない」(p.36)<sup>5)</sup>ものであり、それよりも重要なことは共同体のメンバーの「誰もが納得する」ということによって規定されている点である。それは同じ環境においてともに生きるなかで自然と「読

解される」ものでなければならない。

そして、これらの「作法」は、自然も含めた共同体の全ての構成者が生きることができ、さらには「共同体から受け継がれたもの」(p.40)<sup>5)</sup>を継承するための役割を持っている。

なお、こうした共同体の作法に関する議論は、共同体における「共有物」や「総有物」へと発展してくるのであるが、本稿の論旨とは離れるものであるので、ここではこれ以上触れないことにする。

### (3) 共同体の多層性

内山は、上野村を例にして、①日常的なつき合いのある共同体、②道の維持など、ひとつの集落では完結できないことを補完しあう集落の連合体のような共同体、③江戸時代の檜原村、④上野村、と言うように「私にとって地域共同体はけっしてひとつではなく、内容の違う四つの地域共同体が積み重なったかたちになっている」

(p.72)<sup>5)</sup>ことを指摘している。さらに、これらに加えて「職能的な共同体」(p.72)<sup>5)</sup>の存在も指摘している。

こうしたことから内山は、共同体のあり方について以下のように述べ、その「多層性」について指摘している(p.76-77)<sup>5)</sup>。

私は共同体は二重概念だと考えている。小さな共同体がたくさんある状態が、また共同体だということである。ひとつひとつの小さな共同体も共同体だし、それらが積み重なった状態がまた共同体だともいえばよいだろうか。このような共同体を私は多層的共同体と名づける。共同体のなかに、小さな共同体が多層的に積み重なっている、多層的共同体とは、そんな共同体のことである。

つまり、このことは、地域というものは、ひとつの共同体に全てのメンバーが統合されて成立しているのではなく、多様で多層的な構造を持って成立していることを意味している。

## 3. 共同体からみた風景

ここでは、内山の共同体理論を参考に、共同体からみた風景の構造について考察してみたい。

### (1) ともに生きる環境としての風景

前章でみたように内山共同体理論によれば、日本の共同体は人間と人間だけでなく、人間と自然によって構成される「小宇宙」のような存在と言える。この共同体には人間と人間、人間と自然が「ともに生きる」ために形

成された「作法」が存在している。

つまり、共同体においては、その風景をみる人(視点場)とみられている環境(視対象)の間に、共同体の「作法」を通した様々な関係が成立しており、生活、生業、信仰を通して、「ともに生きる環境」として風景がみられることになる。それは「美しい」とか「心癒される」とか言いたいわけの「景観」をみるような目線ではなく、「ともに生きる」ものに対する「まなざし」(p.45)<sup>5)</sup>である。

こうした人々の環境に対する「まなざし」に私たちは素直に耳を傾けなければならない。素直に耳を傾けるといことは、人や共同体、もしくはその関係のなかに相反する「物語」が存在しているという矛盾をそのまま受け入れることを意味する。私たちに求められているのは、科学的であること、合理的であることにとらわれない視線である。

ところで、ここで述べた、風景をみている人とみられている環境との関係は、桑子が「現場にたつて全体をみる」<sup>6)</sup>と表現しているものに近いのではないかと思われる。つまり、共同体の人々は、現場(視点場)にたつて、全体(人間も自然も含めた共同体)をみていることにはなるのではないか。だとすれば、共同体の風景は、桑子が定義する「身体が位置するところで知覚された空間の姿」<sup>7)</sup>としての風景と高い共通性を持っていると考えられるが、このことに関する論考は別の機会に譲ることとする。

### (2) 多層的な風景の意味

地域には複数の共同体が存在する。そのひとつひとつの共同体において、地域のルールと人々の物語が存在するはずである。共同体の数だけ風景の意味も存在する。これは単に「見る人によって風景の意味は変わる」という単純な話ではなく、大切なのは、それぞれの共同体が独立した世界観を持っているということである。

さらに、地域には共同体が多層的に存在している。つまり、共同体と向きあうということは、単に地域を詳細に調べていけばよいという話ではなく、小さな共同体にある価値感とそれら小さな共同体が積み重なって存在する共同体にある価値感との関係について、共通する部分や独立する部分について立体的、構造的な理解が求められるということでもある。

### (3) 変容する風景

我国における共同体について内山は、近世以降の変化を述べた上で、「日本の伝統的共同体は戦後の高度成長をへて20世紀終盤になると、ほぼ解体されたのではないか」(p.156)<sup>5)</sup>と述べている。特に、ほ場整備や用水路

事業によって共同的な水管理のあり方が変化したことで、「共同体機能の核心的な部分が衰弱した」(p. 156)<sup>5)</sup>と述べている。

こうした状況のなかで、共同体の風景はその変容の速度を速めている。それは単に担い手や政策だけの問題ではなく、共同体における人と人、人と自然の関係の変化によってもたらされるものである。我々は、都市だけに限らず、農山村、漁村においても、その風景の変容を前提として考えていかなければならない時代を迎えている。

そうした状況のなかで、内山は共同体の未来について以下のように述べている。(p. 157)<sup>5)</sup>

しかし、にもかかわらず、共同体はその命脈を閉じたわけではなかった。共同体を維持しようとする意図が、村人のなかには存在していたからである。共同体が壊れたとき、逆に共同体を維持しようとする人々が登場してきた。このときから共同体は意図された共同体に変わった。

私たちは、共同体の風景が変容していくことを受け入れながら、しかしそれでも共同体を維持しようとする人々の動きを察知し、「新たなかたちで維持すべきもの、創造すべきもの」(p. 159)<sup>5)</sup>としての共同体に対する取り組みに参加していかななくてはならない。

#### 4. 共同体の風景と向き合うために

では、我々はいかにして共同体の風景と向きあっていけばよいのだろうか。ここでは、そのアプローチの方法について考えてみたい。

##### (1) スケールを読む

まずは、地域のどこにどのような共同体が存在しているのかを知ることである。小さな共同体とそれが積み重なってできる共同体が、どのように「多層的に」存在しているのかを立体的に把握する。ここではこれを「共同体のスケール」と呼ぶ。前述したようにそれぞれの共同体にはそれぞれの風景の意味が存在している。そして、それらひとつひとつにアプローチしながら、景観に関する合意形成を積み上げていくときに、この「共同体のスケール」は、地域における「合意形成のスケール」と重なってくるのではないかと考えられる。

たとえば、地域で計画やデザインを行なう際に行なわれる「ゾーニング」は、通常景観特性や土地利用特性に応じて行なわれる。しかし、計画の実現化まで見据えて考えれば、多層的に存在する共同体における合意の形成

が重要な課題となるはずであり、そのとき「共同体のスケール」、すなわち「合意形成のスケール」を踏まえてゾーニングされることが重要である。同じ景観特性、土地利用特性を持っている二つの地域があったとしても、それらの意志決定の仕方、時間の流れ、作法が異なる場合には、それに応じた異なるアプローチが必要になる。

もちろんそのアプローチは決定しようとする内容によっても変わってくる。桑子は、社会的合意形成について「辛い合意形成」(みんながハッピーにはなれない合意形成)と「楽しい合意形成」(工夫をすればみんながハッピーになれる可能性のある合意形成)の存在を指摘しており<sup>8)</sup>、こうした合意形成の種類も同時にそれぞれの共同体において把握する必要がある。

計画の実現、実行に向けては、こうした合意形成のスケールと種類を見据えたアプローチが重要である。共同体が多層的に存在するのであれば、合意形成も当然多層的に行なわれる必要があるだろう。

##### (2) 入り口を見つける

では、我々はそうした共同体に対して、どのようにアプローチすればよいのだろうか。内山は、共同体について以下のように述べている(p. 170)<sup>5)</sup>。

歴史的にも日本の共同体は「閉じられた共同体」ではなかった。農村の人々もまた講をつくり、外部の世界と結ばれていた。もちろん経済活動や社会的交通をとおしての外部との結びつきもあったが、日本の共同体は外との結びつきをもつことで、内部的世界も確立するという性格を保持してきたのである。

つまり、共同体は、いわゆる古典的なイメージにおける「閉じた集団」ではなく、その共同体を出入りする者(例えば修験者、富士講、伊勢講)を介して外の世界と広くつながっていた。そして、おそらく地域外の者に対して入り口となる者や受け入れる際のルールやシステムが存在しているのではないだろうか。そうした共同体それぞれが持っている地域外の者の受け入れ方にあわせて我々は地域にアプローチしていくことが求められる。

##### (3) 作法を学ぶ

共同体にアプローチすることができたら、人々の話を聞きながら、そこでともに生きる中で形成された共同体の作法(ルール)を学ぶことに時間をかけたい。共同体を構成する要素ひとつひとつについて、人々がどのように関わっているのか、関わってきたのかを知ることが大切であろう。また、いわゆる「景観」に直接関わる建築行為等に関するものでなくても、地域の作法を知ること

で、地域の人々がどのような環境で、どのように生きてきたのかを知ることができる。こうした「物語」のなかに地域の未来の方向性を考えるうえで「変わらない部分」をみつけることができる。この「変わらない部分」がいわゆる「地域らしさ」と呼ばれるものではないかと思う。

そして、この「変わらない部分」をみつけることができれば、地域の作法を、今の時代のなかで地域に必要な仕組みやルールとして再解釈することが可能になってくるのではないかと考える。

筆者が関わった湯の坪街道周辺地区景観計画・景観協定では、景観も含めた地域のこと全般において「皆で話し合っただけで決めてきたこと」を「変わらない部分」として理解し、その中でつくられてきた建築物等に関する地域ルールを明文化することに取り組んだ<sup>9)</sup>。その上で、景観条例の「近隣関係者の理解」の条項によって景観計画の届出事前協議で建築行為者側と住民との意見交換を可能とした。この意見交換の積み重ねのなかで「あの建物は騒々しい」「あれは由布院らしくない」という住民の言葉が、法制度に基づいた景観のルールを通して建築行為者側に届き、ルール以上の効果を発揮している。

#### (4) 共同体の時間の流れにあわせる

民俗学者の宮本常一は『忘れられた日本人』のなかで、対馬の集落で文献を借りる際に、貸すか貸さないかについて、住民が寄り合いで時間をかけて話し合う様子を伝えて、「これならせまい村の中で毎日顔をつきあわせていても気まずい思いをすることはすくないであろう」と述べている<sup>10)</sup>。共同体には、皆が納得するための意志決定のスピードや仕組みがそれぞれの地域に応じて存在している。

2(2)でも述べたように、共同体での物事の決め方は、明文化されたものではなく、共同体のなかにいると自然と「諒解される」ものであり、そのため外部の人間には理解しづらいものでもある。特に意志決定のプロセスは事の重大さやそのときの状況によってケースバイケースでもありわかりづらい。

私は、景観計画の策定や運用において、地域のルールを再解釈する場合には、その意志決定のスピードを地域の共同体の時間の流れにあわせることが重要であると考えている。逆に言えば、景観計画は、こうした地域の時間の流れを外部の者に伝える役割を担えるのではないかと考えている。景観計画の運用においては、事前協議等で様々な工夫がされているが<sup>11)</sup>、実際には共同体の時間の流れにあわせることを意識している事例は少ない。

前述した湯の坪街道周辺地区景観計画・景観協定では、地元住民委員会で2年半の時間をかけて景観計画を策定

し、皆の合意を形成することができた<sup>9)</sup>。また、前述した景観条例における「近隣関係者の理解」の手続きによって、行政制度における事務的な時間の流れに一定の歯止めをつくることができたと考えている。逆に言えば、こうして時間の流れを少し遅くすることによってはじめて、地域住民が行政の意志決定に参加できるようになり、共同体の風景を景観行政の施策で取り扱うことが可能になるのではないかと考える。

#### (5) 風景を繕い続ける

地域のなかでの共同体のスケール、合意形成のスケール、種類を読み、共同体の人々の物語に耳を傾け、地域の作法を知り、それを現代版に再解釈し、さらにその決定や運用のプロセスの時間を地域の時間の流れに合わせる。共同体の風景に向き合うには、これまでの計画やデザインにおけるユニバーサルな方法を、共同体発のものに大きく変える必要がある。

そして、さらにそれに加えて、3(3)で述べたように私たちは風景が変容していく時代を迎えており、その風景の変容を受け入れながら、逆に共同体を再創造することを考えていかなければならない。内山は、共同体を維持しようとする人々の存在について以下のように述べている (p.158)<sup>9)</sup>。

*私が意図的に共同体を守る動きが生まれた、と述べるときの「意図的」とは、意識的なものだけをさしてはいない。意識的に守ろうとする衝動だけでなく身体的な衝動、さらには霊的な衝動が共同体を守るべきものと教えていた。だから意識としては共同体的な暮らしを否定する人までが、どこかで共同体を守ろうとする動きをみせていた。この自然と人間の里を守る。自然のなかに「神々」を感じる精神世界を守る。ともに生きる世界を守る。このことを、ときに意識的に、ときに身体的に、ときに霊的につかんでいる人々によって、今日の共同体は、意図的に維持された共同体になった。*

では、私たちがこうした共同体を維持しようとする人々とともに地域の未来を考えようとするときに大切にすべきことは何であろうか。このことについて、由布院で長く「共同体を守ろう」としてこられた中谷健太郎の言葉が参考になるのではないかと考える<sup>12)</sup>。

*「風景」は「記憶」を辿って、そこに行き着く場所であり、そこで他人と一緒に生きる場所である。ならば人は「記憶」の中の「場所」で「風景」を他人と「共有」しながら、それを「保全」し続けることができるか?できない。なぜ?現実の「風景」は人や他力によって「破*

壊]され、或いは自力で「崩壊」してゆくからだ。「風景」が変わればどうなる？人は「過去の記憶」の拠り所を失い、「生きてきた土地」の道筋を忘れ、「住んでいる領域」の境界が溶け出して精神が放浪を始める。人は「心の故里」と「時間の刻印」を同時に失うのだ。どうする？周りの「風景」を自力で「繕い続ける」、それしかない。

大切なことは、風景を「つくる」対象としてではなく、「繕う」ものとしてとらえることである。そして、私たちは、こうして「風景を繕い続ける」人々とともに「地域に関わり続ける」ことが求められているのではないだろうか。地域に関わり続けること、これがもっとも重要でかつ困難な課題であり、しかし、このことを抜きにして、これまでに述べたような共同体の風景へのアプローチは成立しないのではないかとも思われる。

## 5. おわりに

内山は、共同体を考えることの重要性について「歴史改革の方向性が、『大きな転換』から『小さな積み上げ』へと変わってきている」(p. 165)<sup>5)</sup>と述べている。この状況は景観に関しても変わらないのではないかと思う。我々には、地域の状況に応じた多様で豊かなアプローチが求められている。そしてこのことは、我々ひとりひとりが、そうした取り組みを通じてこの国の風景の未来に参加できることを意味していると考えたい。

では、そうした「小さな積み重ね」において何を大事にしていけばよいのだろうか。内山は、共同体を共同体たらしめていくものについて以下のように述べている(p. 168)<sup>5)</sup>。

私たちがつくれるものは小さな共同体である。(中略)ただしそれを共同体と呼ぶにはひとつの条件があることは確かである。それはそこに、ともに生きる世界があると感じられることだ。

地域の人々が風景を繕い続けることが、そこに「ともに生きる世界」を生むことにつながる、そんなプロセスをつくっていくことが地域に関わり続けるなかで重要な姿勢となるのではないかと考える。

なお、本稿は、共同体の風景と向きあうという大きなテーマに対して、到底不十分な考察にとどまっている。特に内山が指摘するように我国の共同体の特質が自然との一体性に起因するものであるとすれば、筆者が自然と人間との関係についてきわめて浅い理解しかもっていない

いことが大きな欠点であると感じている。今後は都市や農山村、漁村等さまざまな場所における人と自然の関係についてより一層理解を深めていきたい。

## 参考文献

- 1) 篠原修：時代を画す文化的景観の概念ととの展開，ランドスケープ研究，Vol. 73, No. 1, pp. 2-5, 2009. 4
- 2) 内藤廣：建築のちから，pp. 138-140, 王国社, 2009. 7
- 3) 佐々木葉：現代の景観の目的と処方，景観・デザイン研究講演集，No. 1, pp. 276-281, 2005. 12
- 4) 筆者によるヒアリングによる，2009. 11
- 5) 内山節：共同体の基礎理論 自然と人間の基層から，農文協, 2010. 3
- 6) 桑子敏雄：風景のなかの環境哲学，pp. v, 東京大学出版会, 2005. 11
- 7) 桑子敏雄：環境の哲学，pp. 5, 講談社学術文庫, 1999. 12
- 8) 桑子敏雄：社会的合意形成と風土の問題，千葉大学公共研究，第3巻第2号，pp. 114-122, 2006. 9
- 9) 高尾忠志：地域ルールと明文化と共有に向けた景観法の活用，景観・デザイン論文集，No. 7, pp. 1-12, 2009. 12
- 10) 宮本常一：忘れられた日本人，pp. 21, 岩波文庫, 1995. 2
- 11) 小浦久子：まとまりの景観デザイン，pp. 221-223, 学芸出版社, 2008. 9, 原田佳道：景観法の現状と課題，季刊まちづくり，No. 28, pp. 28-29, 2010. 9
- 12) 中谷健太郎：蘇りませや，地域の繕い屋さんたちよ，博多夢松原の会20周年記念誌, 2007